HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小川未明と満州事変 ： 後退するラディカリズム
Author(s)	増井, 真琴
Citation	層 ： 映像と表現, 11, 188-207
Issue Date	2019-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/88031
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73522
Type	departmental bulletin paper
File Information	ogawamimei.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小川未明と満州事変——後退するラディカリズム

増井　真琴

はじめに

鶴見俊輔が、かつて自戒を込めて警告したように、転向問題を論じる際には、ある種の危険性が伴う。それは論者が、ともすれば、一方的な糾弾者・断罪者に陥りかねない危険性である。鶴見は、「同時代の非転向者の場所に自分をおいてそこから（転向者を——引用者注）裁くという態度」（「転向の共同研究について」『共同研究転向　改訂増補版』上巻、平凡社、昭和五三年二月）を固く戒めているが、これは学問的にも、倫理的にも、正しい姿勢だろう。

その戒めを踏まえた上で、筆者はあえて断言したいのだが、小川未明は転向者である。それも、社会主義から国家主義へ、国家主義から戦後リベラリズムへと、二度にわたって変節を繰り返した転向常習者である。本稿で筆者が検証したいのは、未明の思想的変遷に関することだ。

というのも、これまでの小川未明研究史において、十五年戦争下の転向や国策協力は、十分に検討されてこなかったからである[1]。とりわけ、十五年戦争の序盤にあたる、満州事変（柳条湖事件—塘沽停戦協定）から日中戦争（盧溝橋事件）へかけての動向は、未明の本格的転向の契機が日中戦争——作品としては、童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）——以降であるという事情もあって、先行研究の蓄積が、ほとんど皆無に等しい。

研究史上、かかる空白地帯が生まれてしまった背景には、「赤い蝋燭と人魚」「野薔薇」「金の輪」等、名作と名高い大正期のロマンチシズム童話のみを、もっぱら考究の対象として来

た、（児童）文学研究者の慣習の問題があるだろう。筆者は、上記の慣習を「大正童話中心主義」と名付けている。そして、明治・大正・昭和の三代を生き、詩人・小説家・政治的イデオローグ等、様々な相貌を持つ文人・未明の十全な理解にあたっては、「大正童話中心主義」は克服されなければならないと考えている。

そこで本稿では、今回、満州事変から日中戦争へ至るまでの約六年間を射程に据え、十五年戦争初期の未明の思想動向を解明したい。故に筆者は、まず、柳条湖事件から塘沽停戦協定までの足跡を包括的に検証するとともに**（一節）**、この時期の代表的作品である童話「青空の下の原つぱ」（『週刊朝日』昭和七年一月三～二四日、全四回）を分析することで**（二節）**、満州事変下の未明が、大正期に顕著だった左翼ラディカリズムを後退させつつも、いまだ社会主義思想の影響下にあった事実を明らかにする。次に、塘沽停戦協定から日中開戦へ至るまでのテキスト群の検討を通して、当時の未明に芽吹きつつあった、転向の萌芽を確認する**（三節）**。さらに、満州事変後の文学者の動向の包括的な素描を通して、このような隠微な右傾化をもたらした、文学史的背景を考察する**（四節）**。

右へ行くべきか、左に留まるべきか――転向数歩手前の地点で揺らぐ、昭和一〇年前後の小川未明の動向をつまびらかにすることが、本論の課題となる。

一、社会主義思想の持続 ――柳条湖事件から塘沽停戦協定まで

満州事変下、小川未明は、如何なる政治思想を有していたのだろうか。本節では、石原莞爾ら関東軍の謀略によって勃発した柳条湖事件（昭和六年九月）から、蔣介石ら国民党政府によって、「満州国」が事実上、黙認されるに至った塘沽（とう こ）停戦協定（同八年五月）までの約一年九ヵ月の事績・文業を分析することで、この間の未明の思想動向を明らかにしたい。

総じて言えば、満州事変下の未明は、依然、社会主義思想の影響下にあった、と言える。というのも、当の未明自身、自らアナキストをもって、任じていたからである。新聞の文芸欄で、自己の思想遍歴を問われた際、未明は「新ロマンチシズムより、アナーキズムへ」（「文芸思想　Who's Who 28」『読売新聞』昭和七年二月六日）と回答。自身がアナ系の左翼であることを、決して隠してはいない。

また、雑誌のアンケートで愛読書を問われた折は、「生物学に関するもの。原始人の生活研究。自由思想の研究。等のものは、なるべく最新の真面目なものを愛読します」（「童話家と修

養」『童話研究』昭和六年九月）と断った上で、帝政ロシアのアナキスト、ピョートル・クロポトキンの『相互扶助論』の名を挙げている。本アンケートでは、愛読書の他に、崇拝する人物についても、回答を求められているのだが、未明がそこで挙げた唯一の人名もクロポトキンだった。「人類愛に輝く、偉大なる先覚者として」、未明はこの異国の革命家を尊敬していたらしい。

さらに未明は、アナキズム文学の進むべき道について、「排理論、排指導、しかして個性を尊重し、常に人生に対する正義、友愛善美の感激より出発し多様なる生活を活写する情緒主観の文学を提唱します」（「アナーキズム文学は如何に進むべきか」『アナーキズム文学』昭和七年六月）と、自身のアナキズム文学観を披瀝したりもしている。アナキズムに関しては、一家言あったのである。

無産者階級と資本家階級の利害を対立的に捉える階級意識も、いまだ、健在である。この頃、昭和六・七年は、いわゆる昭和恐慌によって、不況が深刻化し、都市では労働者の馘首が、農村では女子の身売りが、横行していたわけだが、かかる世相の原因を問われて、未明は次のように回答している。

政治の職業化、資本家の横暴、政党の無益な勢力争ひ、搾取階級の無反省、これ等が原因して、貧富の懸隔はますます甚しくなり、共労共楽の人生の理想、道徳より遠ざかり、勤労者の生活は、日々不安に襲はれたる結果に他なりません。ロシアの千八百六十年代の恐怖時代を想起します。

「組織の合理的変革」（『青年』昭和七年四月）

「資本家」や「搾取階級」の専横――あるいは、既成政党の無能――が「貧富の懸隔」を生んでいる、というのが、未明の情勢認識である。資本主義制度下の階級格差に対する批判は、これ以外にも確認できる[2]。

文筆のみならず、実践面においても、未明は若干の関与を試みていたようだ。当時の新聞記事「プロ託児所　左翼文壇人等も片棒担いで」（『読売新聞』昭和七年三月三日）は、未明がこの時期、プロレタリアートの子弟のための「無産者託児所」を設置する運動に、一枚噛んでいた事実を報じている。この運動は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）等、左派系の諸団体が主導した運動で、中條（宮本）百合子・大宅壮一・貴司山治といった日本共産党系の文壇人も、賛助人に名を連ねていた。昭和初年以降、未明はアナ派の立場を鮮明にする過程で、ボル派との分岐を決定化させて行くわけだが、ボル派の人々と共闘

する場面も、なお一定程度、存在したのである。

とは言え、全体として見れば、当時の未明は、マルクス（共産）主義に対して、極めて批判的なスタンスを取っていた。例えば、次のような発言から、その立場は看取できる。

> ロシアは、強制によつて、児童時代から、共産主義的教育を施してゐます。共産主義の制度についても、道徳についても、一面の真理があるにちがひないが、主義の上から空想を排し、自由を奪し、機械化することを見る時、児童の将来に対して憐れまざるを得ないでありませう。（中略）ロシアの共産主義に指導さるる教育が、やがて、新味を失し、形式化し、硬化した時、それが、一層、自由精神に乏しきだけ、どれ程不具者の人間を産出するか分らないのです。
>
> 「児童教育とヂャナリズム」
> （『童話雑感及小品』文化書房、昭和七年七月）

周知の通り、マルクス主義は、史的唯物論や階級闘争理論によって、人類の歴史の発展法則を明らかにした思想だが、ここで未明は、そのイデオロギーの「真理」を一定認めつつも、かかる教義に基づいたロシア（ソビエト連邦）の教育制度を批判している。それは、「自由」や「空想」を排除しているが故に、人間を「不具者」たらしめる可能性があるというのである[3]。

しかし、右記のようにマルクス主義と距離を取る未明が、大正期、マルクス主義――あるいは、革命ロシア――に一方ならぬシンパシーを抱いていた経緯は、既に別稿で記した通りである[4]。大正・昭和初期の未明の社会主義思想への接近が、もっぱらアナキズムの観点からのみ語られ、未明＝アナキズム系作家という図式が、現在に至るまで通説化しているのは[5]、この時期のマルクス主義批判に拠るところが大きいだろう。昭和初期の段階で、未明のマルクス主義（およびソビエト連邦）への評価が、相当変化している点には注意が必要である。

同時代の児童文学界の人々も、未明をアナキストとして認識していた。例えば、尾関岩二は、「さういふ意味で彼は愛すべきアナアキストである。徹頭徹尾、戦ひ、主張するアナアキストである。（中略）社会民主々義や、共産主義やが、野心あるダラ幹に毒せられてしまつてゐる今日、小川未明氏の社会正義の訴へは永遠に、その純潔を失はない」（「童心久遠」『童話研究』昭和六年一〇月）と、アナキスト・未明の偉大を讃えているし、蘆谷蘆村（あしやろそん）は、「多年資本主義の横暴と闘つて来た小川さんは、またボルシエヴイズムの横暴と闘はねばならなかつた。小川さんの心や悲壮である。しかし、日本の子どもたちは、永

久に子供の自由の擁護者小川未明に感謝するであらう」（「明治以来最大の散文詩人」『童話研究』昭和六年一〇月）と、未明を反ボル派の闘士として持ち上げている。

一方で、当時の未明評をつぶさに読むと、彼が穏健な「人類愛（主義）」に傾斜する反面、左翼としての闘争をほとんど放棄している旨、指摘した同時代評も散見される[6]。大正期、「階級闘争」を高らかに謳い上げ、日本社会主義同盟の設立発起人に名を連ねるなど、現実の社会主義運動にコミットしていた未明の左翼ラディカリズムが、この時期、一定の後退を見せていたことは、疑い得ないだろう。それは明確な転向ではないが、後の転向の伏線となる、確実な退歩であった。

未明の政治的後退は、彼が何を言ったかではなく、何を言わなかったかによっても、窺い知ることができる。それは、小林多喜二の拷問死（昭和八年二月）や京大・滝川事件（同四月）等、当時ますます厳しさを増していた国家権力の言論・思想統制に対して、知識人・未明が如何に身を処したのか、という問題である。昭和八年の治安維持法による検挙者数は、戦前最多であった。

結論的に言えば、未明はこれらの国家暴力に対して、何ら非難や懸念の言葉を口にしていない。時の政治状況がそれを許さなかった――と言ってしまえば、それまでであるが、ここには間違いなく、弾圧を回避しようとする、大人としての処世が働いている。別言すれば、先の同時代評で称賛されているほど、未明の左翼思想は純粋真直なものではなかった、と言える。逮捕されても国家権力と対峙する、というほどの気概と覚悟を、未明は持ち合わせていなかった。

かくして、満州事変下の小川未明は、大正期から引き続き、社会主義思想の影響下にあった。そして、その思想傾向は、反マルクス主義的なアナキズムの系譜に位置付けられ得る性質のものであった。しかし、時の政治情勢の厳しさも関係しているのだろう。昭和七年に五〇歳を迎えた、未明の左翼ラディカリズムが、一定の衰えを見せていることは、否定できない事実である。

二、童話「青空の下の原つぱ」――残留する階級意識

満州事変下の小川未明が、持ち前のラディカリズムを後退させつつも、社会主義思想を持続的に保持していた、という前節の論旨は、この時期に書かれた童話作品からも、論証され得る。本節では、日本人僧侶襲撃事件を経て、第一次上海事変が勃発した昭和七年一月に発表された、童話「青空の下の原つぱ」（『週刊朝日』一月三～二四日、全四回）を読み解くことで、こ

の時期の未明の思想動向を明らかにしたい。

本作の主人公は、雑誌記者の息子で、翌年、中学校へ進学予定の小学生・正二である。年齢は、一一歳ほどか。正二には、秀吉と立雄という同級生の友人がおり、秀吉は廃品の売買で生計を立てる屑屋の息子、立雄は会社の重役の息子と、それぞれ貧富の格差が激しい。物語は、彼ら三人の家族や、彼らの遊び場となっている近所の原っぱの大人たちの人間模様を織り交ぜつつ、少年間の友情（とその破綻）を描いている。

創作ジャンルは、リアリズム的な筆致で子どもの日常を綴る、生活童話と言って差し支えないだろう。プロレタリア児童文学から生活童話への流れは、昭和七年前後の児童文学界の潮流でもあった[7]。

本作に関する独立した作品論は、現状、存在しないが、同時代評や先行研究における部分的論及は、いくつか存在する。

まず、外形的な話として興味深いのは、本作の尺に関する指摘である。槇本楠郎は、「「青空の下の原つぱ」は、本集中の圧巻で、また稀に見る長編である」（「現童話壇と小川未明の存在」『生活学校』昭和一一年六月）と述べ、本作が、短編作家の未明としては、異例の長さを誇っている旨、指摘している。原稿用紙換算で、約六〇枚といったところだろう[8]。確かに、未明にしては、長い。

そして、この尺の問題とあるいは関係しているかもしれないのが、作中へ織り交ぜられている、時代表象に関する指摘である。小埜裕二は、「本童話集でもう一つ注目されるのは「青空の下の原つぱ」に見られる童話世界の拡充である」（「青空の下の原っぱ」『解説　小川未明童話集45』北越出版、平成二四年三月）と述べ、凶作によって深刻化していた東北飢饉の状況等、「当時の時代状況を俯瞰的に描こうとする未明の姿勢」を、本作の注目点として挙げている。つまり、時事的な素材を、紙幅を割いて作内に取り込んだことが、「童話世界の拡充」として、一定評価されているのである。

しかし、こと内容に関して、筆者がもっとも重要だと考えるのは、本作を少年間の階級対立的なドラマとして捉えた、高瀬嘉男や続橋達雄の指摘だ。高瀬は「三人の少年は、それぞれの名において、別個の階級を代表してゐる」（「「青空の下の原つぱ」を読む」『童話研究』昭和七年八月）と、続橋は「会社重役の子の立雄が上流家庭、古道具屋兼屑屋（廃品回収業）の子の秀吉が貧しい家庭を代表しているとすれば、正二はちょうどその中間に属している」（「解説」『定本小川未明童話全集』第八巻、講談社、昭和五二年六月）と述べ、正二・秀吉・立雄の三人の登場人物に、三者三様の階級的役割が仮託されている由、指摘している。

すなわち、立雄＝上層階級（ブルジョアジー）、秀吉＝下層階級（プロレタリアート）、正二＝中間階級という役回りである。正二の父の職業が、雑誌記者として設定されている点を踏まえれば、正二は中間階級のみならず、知識階級（インテリゲンチャ）の分身であると言えるかもしれない。

なお、高瀬は、本作について、「本輯（しゅう）に収められた数多の作品の価値は、この中篇一つに代表されてゐる。（中略）本年度上半期における佳篇として推賞さるべきであらう」と述べ、その作品としての質を讃えているが、先に紹介した槇本の「本集中の圧巻」という評言を含め、同時代的に、この中篇童話が極めて高く評価されていた事実が見て取れよう。プロレタリア児童文学理論の代表的論客である槇本が、本作を高く評価したのは、本作が左派好みの階級対立的枠組みを有していたからに違いない[9]。

したがって、以下、本稿では、作中人物が代行する階級表象の分析を掘り下げることで、この時期の未明の社会主義思想のあり方を再検討したいと考える。

本作において、着目するべきは、上層階級の所属者が、徹底的な唾棄の対象として描かれている点であろう。主人公の正二は、立雄を「青瓢箪（あおびょうたん）」と罵り、立雄の母を「婆（ばばあ）」と侮蔑的な呼称で嘲弄してやまない。何故、立雄一家がかくまでに嫌悪されているのかと言えば、それは彼らが、下層階級の出身者を見下し、平然と足蹴にする、差別主義者であるからに他ならない。

例えば、自宅を訪ね、遊びの誘いをかける貧児の秀吉に対し、立雄が与えた応えは、冷酷なる拒絶であった。

> 秀公は、正ちやんから、立雄が素敵な飛行機を持つてゐるときいたので、平常は、めつたに遊びに行つたことはないが、どんなのだらうと、見たいばかしに、立雄の家へやつて来ました。「立雄君」と、秀吉は、門のところで、呼びました。けれど、誰も返事をしなかつたのです。「立雄君遊ばない？」と、彼は、家の方を向いて、叫びました。けれど、やはり、誰も出て来なければ、また返事をしませんでした。秀吉は、日ごろから、立雄が、なるだけ自分と遊ばないやうにしてゐるのを知つてゐました。けれどもう一度、呼んでみたのです。「立雄君、ゐない？」すると、窓の戸を開けて、立雄が顔を出して、「あとで」と、一言いつて、すぐに顔を引込めて、戸を閉めてしまひました。

秀吉の遊びの誘いに対し、立雄は居留守を使って、無視を決め込み、最後は冷然と窓からあしらったのである。本作において、立雄は、貧福の如何によって遊び相手を選別する、陰湿な

ブルジョア子弟として造形されている。

もっとも、立雄がこのような態度を取るのは、彼個人の個性というより、一家の教育方針に拠るところが大きい。立雄の母は、「うちで、やかましく、あんな下卑た古道具屋の子や、屑屋などと遊んではいけないと、いひきかせます」と語り、秀吉のような社会的底辺に位置する人々との接触を、堅く戒めているからである。目下の者に対しては、殊更厳しい家庭なのだろう。彼女は、家の女中に対しても辛く当たり、泣かせるなどしていた。正二が、「やな、婆(ばば)あだな」と感じる通り、確かに、あまり気持ちのよい人物とは言えない。立雄同様、その母もまた、出自や職業によって人を差別する、陰険なブルジョア婦人として造形されている。

一方、中間階級（知識階級）に位置する正二の姉は、当初、立雄の学校の成績が優れていることを理由に立雄を称賛、同じ理由で秀吉を軽蔑していたのだが（「あちらの立雄さんをごらん、お前のやうにさう遊んで許りゐなさるか。よくお出来なさるといふのに、さういふ子供とは、お友達とならずに、古道具屋の秀公とか、そんなやうな、勉強ぎらひな者とばかり、友達になつて、それで、偉い人間になれると思つてゐるのかい」）、弟から立雄一家の所業を聞くに及んで、「いつたい、ああいふブルジョア(ママ)には、さういふところがわるいんだよ」と、ブルジョア批判を展開するようになる。そして、「だんだん見え坊の金持よりも、貧乏でも裏表のない生活をする人々の方が、いいといふことを、判つて来」るようになり、秀吉の再評価を始める（「姉さんは、秀吉が、立雄よりも、正二よりも、また他のいい暮らしをしてゐる家の、どの子よりも感心な、いい子に心のうちで思ひました」）。

つまり、正二の姉における、立雄＝立派な優等生、秀吉＝無能な劣等生という序盤の認識は、終盤へ至って、立雄＝心の汚いブルジョア、秀吉＝心の美しいプロレタリアへと、一八〇度転換して行くのである。姉の改心に象徴される、かかるブルジョア否定、プロレタリア肯定こそ、本作において未明が提示したかった、主要メッセージと言えよう[10]。

その点、重要なのが、本作のラストシーンである。作品発表当時の未明の政治的立場を考える上で、このシーンは、極めて暗示的な意味を帯びる。以下、正二・秀吉・立雄の三人で出向いた童話劇――劇の売り上げは東北飢饉救済のためのカンパとなる――観劇の帰路の場面である。

三人が、肩を並べて歩き出すとどこか、うしろの方から、「立雄、立雄……」と、呼ぶ声がしました。三人は、振むくと、一台の自動車が止つて、扉を開け、立雄のお父さ

んが、手招きをしてゐられたのです。「お父さんだ！」と、立雄と正二は、迎ひに来て下さつたのだと思つて、走つて行つて、その車に乗りました。しかし、つづいて駆けて来るはずであつた、秀吉は、見えませんでした。「秀吉君は？」と、正二は、あわてて、動き出した自動車から、飛び下りました。「かまはん、下りなくてもいいぢやないか」と、立雄のお父さんのいはれた、言葉をきき流して、彼は、秀公を追つて、雨の中を駆け出して行つたのです。

立雄の父は、悪天候のため、急遽劇の会場まで、子どもたちを車で迎えに行った。しかし、立雄一家から白眼視されていることを認識している秀吉は、その車に乗らず、ひとり夜の街へ姿を消した。それに気づくや、正二はすぐさま、立雄の車を飛び下り、雨の中、秀吉を追って走り出したのである。

ここには、雨が象徴する厳しい政治状況の中でも、ブルジョア＝立雄ではなく、プロレタリア＝秀吉に連帯しようとする、知識人・未明の心意気が、如実に反映されていよう。童話「青空の下の原つぱ」には、満州事変へ突入してなお、残留していた小川未明の社会主義的階級意識が、疑いなく流露しているのである。

三、転向の萌芽 ——日中戦争への道行き

しかし、ここまで一・二節で確認してきた、社会主義思想の残滓は、時の経つるにつれ、徐々に小川未明の内部から一掃されて行く。本節では、塘沽停戦協定から日中戦争へ至るまでの、未明の思想動向を追跡したい。

現在、未明の転向が、日中戦争を契機として始まったとする見解は、評価が定まった観がある。例えば、山中恒と小埜裕二は、日中開戦直後の童話「僕も戦争に行くんだ」（『お話の木』昭和一二年一〇月）を、未明の戦争協力の嚆矢の作品と位置付けているし、筆者自身、過去に同様の見解を記した経験を持つ[11]。しかし、未明の言動をつぶさに観察すると、彼の転向が、実は日中戦争へ至る前の段階から、着々と準備されたものであることが確認できる。言わば、転向の萌芽とも呼ぶべき右派的言説を、この時期の未明は書き残しているのである。

もっとも、誤解なきよう申し添えると、日中戦争以前の未明は、まだ社会主義の影を引きずっていた。昭和一〇年まで、アナキスト系の解放文化連盟に毎月カンパを寄せ、アナキズムへの共感を吐露していたと振り返る秋山清の証言は、その傍証である[12]。したがって、これらの右派的言説は、当時の未明のテキスト全体から見れば、ごく例外的な一部分に過ぎない。また、

掲載先が雑誌のアンケート等であるため、全集はおろか、単行本に収録されていないものも少なくない。だが、それだけに、後の転向を予見させる符牒として重要な意味を帯びている、とも言える。ここでは三点、その内容を紹介したい。

第一は、五・一五事件に対する評価である。周知の通り、この事件は、帝国海軍の青年将校が、犬養毅（いぬかいつよし）首相ら政府要人を暗殺・襲撃し、日本の政党政治に終止符を打ったテロルだが、未明はこのテロの実行犯へ、極めて同情的な態度を取っていた。公判記事に対する感想を問われ、未明は「常に正しく働いて酬いられず人道なく、良心なく、正義なき今日、五・一五事件は、むしろ××の感情であり憤怒であつたと信じ、××××であると云ふより他に感じはないのであります」（「「五・一五」の公判記事を見て」『政界往来』昭和八年九月）と回答している。伏字箇所は、前者が「革命」、後者が「階級闘争」であろうか。いずれにせよ、未明は、昭和恐慌下、腐敗を深める既成政党や財閥に対し、天誅を下さんとした青年将校らの決起を、一定評価しているのである。

また、裁判終了後は、「五・一五事件の軍人等が死刑を免れたのは、正義の上からいつても、また人道上からいつても、いいことであつた」（「この頃食卓にあつた話」『婦人之友』昭和九年一月）と述べ、「正義」「人道」の観点から、被告人の死刑回避を言祝いでもいた。度重なる弾圧によって、左派の政治運動が社会変革の主体となり得なくなっていたこの時期、未明は、大川周明ら国家社会主義者の思想的影響を受けた軍人らの義挙に、多少の痛快さを覚え、現状変革の希望を見出していたに違いない。戦中、軍部の暴走へ追随して行く下地が、ここにはある。

第二は、天皇制に対する評価である。未明は当時、家族国家観の信奉を明言していた。

> 皇室と臣民との関係は、宗教的であり、信仰であります。この特異の美風は、やがて一家より一村へ、一村より国家に及ぶといふ風に、理論でなく、愛情によつて結合されたるものです。そして、そこには、外国の異なる事情の下に発生した、いかなる理論も、必然性はないのであつて、ここに、天下無比の国体が存在する所以であります。故に、国内八千万の同胞の間に、不当なる貧富の別があつていい筈がない。すべからく、共労、共楽を則（のり）とした、相互扶助の精神に立ち、平和の実を挙げなければならぬと信じます。
>
> 「一三感ずること」（『日本及日本人』昭和八年七月一日）

天皇と国民を親と子の関係に準え、両者の情緒的一体性を統治の原理に据える、家族国家観は、戦前日本の有力な支配イデオロギーだった。日中・大東亜戦争期に入ると、未明はこのイデオロギーの鼓吹を全面化し、天皇を日本のみならず世界の家長へ戴く「八紘一宇」のスローガンを唱えるにまで至るが[13]、その起点は早くも、昭和八年の時点で確認できるのである。

「ケフハ　日本ノ国ヲ　シロシメス　テンノウ　ヘイカ　ノオウマレナサレタ　メデタイ日デス」の文言で始まる幼年童話「天長節」（『コドモアサヒ』昭和九年四月）が書かれたのも、この時期のことだ。

ところで、同時代的に見て、かかる天皇制賛美は、ひとり未明のみに起こった現象ではない。日本共産党幹部の佐野学と鍋山貞親は、昭和八年夏に発表した獄中転向声明「共同被告同志に告ぐる書」（『改造』昭和八年七月）で、コミンテルン（第三インターナショナル）が「三二年テーゼ」で掲げた天皇制の打倒を否定し、天皇制を基礎とした一国社会主義への転向を明言していた。国体変革の試みが即死刑を意味する、改正治安維持法下の日本にあって、「天皇の下の平等」を説く、一君万民的な平等主義へシフトした左翼は、当時、一定程度存在したのである。先の五・一五事件に対する評価とも関連するが、俯瞰して見れば、未明もまた、その流れに掉さしていたと言えよう。

第三は、アジアモンロー主義に対する評価である。この主義は、またの名を、東洋モンロー主義、東亜モンロー主義とも言い、アジアにおける日本の排他的な権益を確保しようとする志向を指す[14]。昭和九年四月、外務省情報部長の天羽英二（あもう）が発した「天羽声明」によって、広く世界へ知られるところとなった。後の「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の源流ともなった外交方針である。

さて、以下は、旧仮名旧漢字等に関する、国字改革の必要性を述べた文章だが、未明は国字の改善は、「今日、提唱されつつある、東洋モンロー主義の上から見ても、極めて緊切なる問題」であると断った上で、次のように持論を展開している。

> 我国の国字改良が、将来に於て、文化促進の目的からして、必ず行はれなければならぬ運命にあるとしたら、いまはまさにその時期でなければならない。そして、東洋諸国結合の理想を有する上からいつたなら、遅きに失するの感をすら抱かせられるのであります。日本人、自から、その煩瑣に困りつつあるものを、満州や、朝鮮の児童等にまで、強ひるといふことは、まことに不合理な話であります。東洋の親善と理解と平和を希念するならば、国字改良は急務に属してゐます。強権に終始した、百千

の政策よりも真に永遠の平和を考へ、精神的の融和と結合をはかるために、新鮮なる国字によつて、新文化建設の実をあげるの優れるに如かずと、いはなければなりません。

「国字改良と時期」
（『童話と随筆』日本童話協会出版部、昭和九年九月）

ここで未明が語っているのは、国字の簡易化によって、アジアの人々の日本語学習の負荷を軽減せしめることは、アジアの友好や団結に資する、という話である。

今日的な観点から言えば、旧字であれ新字であれ、自国の言語を他国（植民地）の人々に押し付けることは、帝国主義的な文化侵略以外の何物でもないわけだが、未明は日本語をアジアの住人に教え広めることを、アジアモンロー主義を推進する立場から、素朴（ナイーブ）に肯定してしまっていた。日本をアジアの指導者と信じて疑わない、このような宗主国意識を内面化したアジア主義志向は[15]、その後の未明が、「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の理念に傾倒して行く出発点として、理解可能だろう[16]。

以上見てきた通り、①五・一五事件、②天皇制、③アジアモンロー主義に対する評価の三点が、塘沽停戦協定から日中戦争へ至るまでの間に芽吹いた、小川未明の転向の萌芽である。従前、繰り返し断っているように、それはただの萌芽に過ぎないが、後の軍閥政治・皇国史観・アジア共同体の礼賛へ繋がる伏線として、重要な意味を帯びているのである。

四、文学者と満州事変　――プロレタリア文学運動の敗北

かくて、満州事変から日中戦争へかけての小川未明は、社会主義から国家主義への移行を極めて隠微なかたちで成し遂げつつあった。それでは、未明における、かかる社会主義思想の後退――国家主義思想への接近――は、時の文壇の潮流と、どのような連関を有していたのだろうか。本節では、満州事変後の文学者の動向を素描し、文学史の主潮を視野に収めることで、未明の右傾化をもたらした文学史的背景を明らかにしたい。

昭和初期、破竹の勢いで、文壇を席巻した日本共産党系のプロレタリア文学運動は、三・一五事件、四・一六事件という二つの大弾圧を経てなお、軽視すべからざる勢力を有していた。昭和六年一一月、プロレタリア文化団体の統一組織である全日本無産者芸術連盟（ナップ）は、ソ連帰りの蔵原惟人の指導により[17]、日本プロレタリア文化同盟（コップ）へと組織的編成を遂げ、中央協議会をピラミッドの頂点とする、強力な中央集権体制を確立する[18]。

中央協議会の委員を務めたのは、小林多喜二・中野重治・中條（宮本）百合子・壺井繁治・村山知義といった面々である。海外からは、マクシム・ゴーリキー（ロシア）、アンリ・バルビュス（フランス）、魯迅（中国）らが、名誉協議員として名を連ねた。コミンテルン（第三インターナショナル）―日本共産党の系列下にあるコップは、国際共産主義運動と緊密な連携を取る、文化組織だったのである[19]。

コップが、自らのイデオロギーを宣伝するために発行した出版物は、質量ともに目覚ましい。すなわち、中央機関誌『プロレタリア文化』や婦人啓蒙誌『働く婦人』、大衆啓蒙誌『大衆の友』等が、それである。また、コップ所属の各文化団体も、各々自前の出版物を発行していた。例えば、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の『プロレタリア文学』、日本プロレタリア美術家同盟（ヤップ）の『プロレタリア美術』、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）の『プロット』等が、それにあたる。総合すると、これらコップ関連の出版物は、一月一四～一六万の部数を誇る月もあったようだ[20]。飛ぶ鳥を落とす、往時の勢いが窺える。

もとより、未明は共産党員ではないが、満州事変後もなお、彼が社会主義思想を持続し得た背景に、このような現実の社会主義運動の存在があることは、間違いないだろう。日本共産党は、未明の左翼思想を支える重要な物理的根拠（のひとつ）だったのである。

しかし、こういった共産党系フロント団体の勇躍を、日本の国家権力が黙って見過ごすはずはなかった。昭和七年三月、官憲は治安維持法によって、中野重治・中條百合子・壺井繁治ら、コップ関係者の一斉検挙を図る。四月には蔵原惟人、五月には徳永直・貴司山治らも監獄送りとなり、逮捕者は、総計約四〇〇名に及んだ。危うく難を逃れた、小林多喜二・宮本顕治・杉本良吉といった幹部連は、非合法の地下生活へ突入し、組織を再建するべく、獅子奮迅の働きを見せる。未曾有の弾圧を経てなお、指導部は決してめげてはいなかったのである。

だが、誰もが小林や宮本のような勇の者ではあり得ない。国家権力の容赦ない仕打ち――小林の惨殺（昭和八年二月）をその頂点とする――に動揺を覚える作家も、次第に目立つようになった。そして、この頃から、コップ指導部の極端な政治主義を非難する声が、ナルプ内部で公然と上がるようになる。林房雄と徳永直が代表的論客である[21]。彼らは、ナルプ構成員に課される工場・農村でのサークル活動や、党公認の文学理論である「唯物弁証法的創作方法」等を、作家の自由な創作活動を妨げる障害として、指弾し始めた。要は、政治と文学を峻別し、文学の独自性を尊重せよ、というのが、批判の大意である。発

言の背景に弾圧への恐怖があるのは間違いないとしても、それ自体、もっともな批判だろう[22]。

とは言え、「政治の優位性」を絶対不可侵の教条とするコップ指導部が、林らの主張を受け入れることはなかった。指導部の芸術観は、おおよそ次のような、妥協の余地ないものであったからである。

> 我々は以上のことから、文化活動と政治的、経済的闘争の結合、特に、文化に対する政治の優位性をはつきり認識しなくてはならぬ。文化に対する政治の優位性は、経済に対する政治の優位性と同様に、理論戦線におけるレーニン主義の闘争が一段と強調して照映したところのものである。そして文化闘争が政治闘争に従属しなければならぬと云ふことのレーニン的理解を発展させて行くとき、芸術、文化は党のものとならなくてはならぬ。
>
> 宮本顕治「政治と芸術・政治の優位性に関する問題」（『プロレタリア文化』昭和七年一〇月～同八年一月、傍点原著者）

ここで宮本が語っているのは、芸術・文化は政治（党）の従属物に過ぎない、という純レーニン主義的な見解である。つまり、芸術至上主義の完全否定だ。そして、この原則を理解しない文士は、「右翼的偏向」「右翼的逸脱」「日和見主義」等の悪罵をもって、指導部から徹底弾劾された。文学青年泣かせと言うべきだろう。

コップ指導部とナルプ所属の作家たちの間の溝は、いよいよ極まった。国家権力の圧制という外在的要因と、コップ指導部の行き過ぎた政治主義という内在的要因により、昭和九年二月、ナルプは解散を余儀なくされる[23]。組織の主力部隊を失ったコップは、追って自然消滅した。コップとは長年敵対関係にあった、労農派系の労農芸術家連盟（機関誌は『文芸戦線』）も、同年一二月、解散を決定する[24]。大正期以来、社会変革を志す革命勢力として文化的ヘゲモニーを握ってきた、戦前日本のプロレタリア文学運動は、無残な敗北を遂げ、文学史の表舞台から姿を消したのである。はっきり言おう。左翼は負けたのだ[25]。

プロレタリア文学の衰退と軌を一にして、文壇では、「文芸復興」と呼ばれる現象が巻き起こった。文芸復興とは、マルクス主義失墜後の文芸の隆盛振りを表わす用語で、昭和八年から一二年の約五年間を指すのが、文学史上の定説である。主要な出来事としては、①新人・中堅・ベテラン作家の広範な活躍、②『文学界』『行動』『文芸』といった（商業）文芸雑誌の相次

ぐ発刊、③芥川賞・直木賞を始めとする各種文学賞の創設等が挙げられる。

例えば、①について説明すると、この時期、文学の世界では、第一回芥川賞を「蒼氓（そうぼう）」（『星座』昭和一〇年四月）で受賞した石川達三を始め、太宰治・北条民雄・岡本かの子といった気鋭の新人が、多数登場していた。小林秀雄・横光利一・川端康成ら中堅作家も、健筆を揮い、存在感を示した。川端の小説「雪国」（『文藝春秋』昭和一〇年一月～）は、文芸復興期を代表する作品である。ベテラン勢では、谷崎潤一郎が名作「春琴抄」（『中央公論』昭和八年六月）を著す他、島崎藤村・志賀直哉の二大家が、未完の長編「夜明け前」「暗夜行路」を、それぞれ完結させた。中野重治・徳永直・村山知義といった旧プロレタリア文学作家も、転向文学という新しいジャンルを開拓し、文芸復興に花を添えた。

つまり、文壇を見渡せば、右から左まで、まさに百花繚乱の様相を呈していたのである。しかし、本稿の主役である未明はと言えば、残念ながら、とりたてて、めぼしい大作・傑作の類は残していない。彼は、成人男女がほとんど一顧だにしない、児童文学界というニッチな業界で、あまりパッとしないリアリズム童話を書きながら、ひとり、密かに右傾化していたのである。

ちょうど同じ頃、大衆児童読み物の領域では、戦争に材を取った軍事物が好評を博していた。もっとも作品化された実話は、爆薬を抱えて敵陣へ突撃し、自爆した、第一次上海事変の英雄「爆弾（肉弾）三勇士」のエピソードである[26]。「大東の鉄人」（『少年倶楽部』昭和七年八月～同八年一二月）等、山中峯太郎の軍事冒険小説も子どもたちの胸を躍らせた。ただし、未明以下、芸術系児童文学の書き手が国策の渦に飲み込まれるのは、日中戦争以降のことである。

左翼・リベラルにとっては、冬の季節となりつつあったが、社会の右傾化に抗う運動も、なお一定程度存在した。例えば、昭和八年七月に発足した学芸自由同盟が、それである。この団体は、前掲の京大・滝川事件やナチス・ドイツの焚書事件といった国内外の言論・思想統制に対抗するべく組織された集団で、幹事長は徳田秋声。菊池寛・久米正雄・林房雄・青野季吉・三木清ら、約三五〇名の文学者・知識人が結集した、反ファシズム統一戦線である[27]。が、未明は時局柄、重要な意味を持つと思われるこの反ファッショの人民戦線運動に、関与していない。いや、それどころか、ナチスを肯定するような文章さえ、書いていたのである[28]。

このように、満州事変後の文学史の主潮は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）・日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）

の奮闘から、両団体の退潮を経て、文芸復興へと至る、プロレタリア文学運動衰滅の流れであった。それは、日本共産党の敗北の歴史であると同時に、労農派やアナキストを含めた、日本のすべての左翼の敗北の歴史でもある。そして、思想の物理的根拠となる現実の運動を喪失した社会主義者・小川未明は、時の経るにつれ、徐々に、しかし確実に、右傾化していった。本式の転向までは、あともう数歩であった。

おわりに

以上、本稿では、十五年戦争の初期、すなわち、満州事変（柳条湖事件―塘沽停戦協定）から日中戦争（盧溝橋事件）へかけての約六年間、小川未明が如何なる思想状況にあったのか、当時の事績・文業の分析を通して、検証を行った。

検証の結果、明らかになったのは、満州事変下の未明が、一定の思想的後退を見せつつも、なお自他ともに認める、反マルクス主義のアナキスト系作家として渡世を送っていたこと、この時期の代表作である童話「青空の下の原つぱ」（『週刊朝日』昭和七年一月三～二四日、全四回）には、かかる未明の社会主義的階級意識が、疑いなく流露しているということである。

ただし、繰り返すが、警視庁の特高（特別高等警察）が「課」から「部」に昇格され（昭和七年六月）、小林多喜二が築地警察署で虐殺された（同八年二月）、当時の厳しい言論・思想統制下にあって、未明の左翼ラディカリズムが、大正期ほどの光彩を放っていない点は、否定するべくもない事実である。

そして、だからこそ、と言うべきか。塘沽停戦協定以降のテキストに目を向けると、転向の萌芽とも呼ぶべき右派的言説が、極めて僅少な数ではあるが、確認できるのである。すなわち、①五・一五事件、②天皇制、③アジアモンロー主義に対する評価の三点が、それだ。これらの言説は、後の軍閥政治・皇国史観・アジア共同体の礼賛へ繋がる伏線として、そのまま直結していると筆者は考える。

もとより、上記の右傾化は、時の文壇の動向と無縁な現象ではない。満州事変後の文学史の主潮は、日本プロレタリア文化連盟（コップ）・日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）の奮闘から、両団体の退潮を経て、文芸復興へと至る、プロレタリア文学運動衰滅の流れだが、このような潮流は、左翼作家が自己の思想を固守し続けることを著しく困難にしていた。ロシア革命以来、日本の文学シーンを席巻していた左派勢力は、その存在を一掃されつつあったのである。

小川未明にとって、十五年戦争初期の約六年間は、左翼思想からの撤退と国家主義思想への接近が徐々に進む狭間の季節で

あった――本稿ではそのように結論付けたい。

注

1 検討の不十分さに関する指摘としては、例えば、次のようなものがある。鳥羽耕史「戦後にも高い地位を保ちつづけた未明の戦争責任の問題は、他の多くの文学者と同様に曖昧なまま今に至っている」（「傷痍軍人」石川巧・川口隆行編『戦争を〈読む〉』ひつじ書房、平成二五年三月）。この他、鳥越信「小川未明」（『鑑賞日本現代文学』第三五巻、角川書店、昭和五七年七月）等参照。

2 小川未明「新芸術の個条」（『童話雑感及小品』文化書房、昭和七年七月）参照。

3 当時書かれた、類似のマルクス主義批判には、例えば、次のようなものがある。「生活することの内容は、極めて、複雑であつて、多姿多様であり、幸福といふやうな問題も各人によつて、解釈を異にするかぎり、マルクス主義者の如く、すべてを一元的に見ることは不可能であります。ロシアでは、児童の教育から、空想的、非現実的のものを排除する方針であると噂されるが、一面から見れば、独り、児童のみでなく、人間の本能を無視するものです」（「生活の妙味」『政界往来』昭和七年四月）

4 拙稿「小川未明の知識人批判 ――「童話作家宣言」の真意をめぐって」（『社会文学』平成二八年八月）、「小川未明「時計のない村」論 ――ユートピアンの夢」（『日本文学文化』平成三〇年三月）、「小川未明「血の車輪」論 ――反テクノロジーという基層」（『國語國文研究』平成三〇年六月）参照。

5 秋山清「アナキスト・小川未明」（『文学』昭和三六年一〇月）、上笙一郎「小川未明」（日本児童文学学会編『日本の童話作家』ほるぷ出版、昭和四六年九月）、山室静「解説」（『定本小川未明童話全集』第二巻、講談社、昭和五一年一二月）、同「小川未明」（『日本近代文学大事典』第一巻、講談社、昭和五二年一一月）、続橋達雄「小川未明」（『日本児童文学大事典』第一巻、大日本図書、平成五年一〇月）等参照。

6 高瀬無絃（嘉男）「思想家としての氏はトルストイ、ガンヂィ、キリスト等の無抵抗主義、人類愛主義に讃じて、闘争と強権を極力排している」（「未明童話集（第五巻）を読む」『童話研究』昭和六年一〇月）／前田晃「一時は闘争にも関心を持つたりしたが、今は正義を深く沈滞させて、高い人類愛に燃え立つ心で児童を眺めてゐるやうである。これが詩人としての君の本領であらう」（「偉大なる小児」『童話研究』昭和六年一〇月）／山内秋生（やまのうちしゅうせい）「氏の思想を探る為の一例として、何故氏が社会主義から転向したかについて考へてみよう。思ふに科学的根底に立つ現代の社会主義なるものは、あまりに理知に遍（ママ）し過ぎてゐる所に不満があつた。（中略）一言で云へば氏は真実の意味の詩人だつたのである」（「小川未明氏の近業その他」『童話研

究』昭和七年九月）

7 菅忠道「解説」（『日本児童文学大系』第三巻、三一書房、昭和三〇年六月）参照。

8 続橋達雄「解説」（『定本小川未明童話全集』第八巻、講談社、昭和五二年六月）参照。なお、続橋も、本作の尺が未明としては異例の長さである旨、指摘している。

9 菅忠道は、槇本の「青空の下の原つぱ」評について、「槇本の批評の前提には、たしかに社会主義リアリズムの立場が読みとれる。そういう観点からいっても、この作品が高く評価されたわけである」（『日本の児童文学　増補改訂版』大月書店、昭和四一年五月、二二三頁）と述べ、槇本の高評価の背景には、「社会主義リアリズムの立場」がある由、指摘している。

10 紙幅の都合上、詳述できないが、本作では秀吉以外のプロレタリアート、すなわち、原っぱに住む屑屋の老爺やのっぽの青年も、心の美しい人々として、等しく好意的に描かれている。他方、未明が、立雄のようなブルジョアの子弟に批判的な眼差しを向けていたことは、同時期の評論を見ても明らかである。「さらば、ブルジョアの家庭にあつては如何。経済的からは、家庭教師を雇ひ、思ふがやうに教育されるであらうけれど、それは、畢竟、子供を我儘にして、個人主義者たらしめるの他はないでありませう」（「小学教育の任務を考へる」『教育・国語教育』昭和六年一一月）

11 山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）、小埜裕二「解説」（『小川未明新収童話集』第四巻、日外アソシエーツ、平成二六年二月）、拙稿「小川未明「僕も戦争に行くんだ」論　――国策協力の起点」（『日本近代文学会北海道支部会報』平成二九年五月）参照。なお、同時代を生きた作家の証言としては、関英雄が、それまでの反戦・人道主義的な作風とは異質な同作に大変な衝撃を受けた由、『体験的児童文学史』後編（理論社、昭和五九年一二月、二〇五・二〇六頁）で綴っている。

12 秋山清「《聞き書き》社会思想家としての小川未明」（『日本児童文学』昭和四九年一月）、「あおぞらと未明さん」（『定本小川未明童話全集』第一二巻月報、講談社、昭和五二年一〇月）参照。

13 拙稿「転向者・小川未明（下）　――階級闘争から八紘一宇へ」（『日本文学文化』平成二九年二月）参照。

14 江口圭一『十五年戦争小史　新版』（青木書店、平成三年五月）、『十五年戦争研究史論』（校倉書房、平成一三年五月）、井上寿一『アジア主義を問いなおす』（ちくま新書、平成一八年八月）等参照。

15 未明は当時、欧米列強のアジアに対する植民地支配を苦々しい思いで見つめ、被支配者の代弁者たらんと欲していたようである。「欧州諸国は、行詰れる打開をアフリカやアジヤの未開大陸に求めつつあるは、既に久しい間の黙契であつて、それがために決して、正義に殉ずる国はない。国際連盟の態度に見ても分るのであります。日本

の今後は、少なくも同種族のために、実力ある代弁者であらなければならぬ」（「エチオピヤを憐れむ」『祖国』昭和一〇年一〇月）

16 未明の「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の理念への共鳴については、注13の拙論の他、「小川未明と日本少国民文化協会 ――日中・「大東亜」戦争下の歩み」（『北海道大学大学院文学研究科研究論集』平成二九年一一月）で論述した。

17 蔵原惟人「プロレタリア芸術運動の組織問題」（『ナップ』昭和六年六月）、「芸術運動の組織問題再論」（『ナップ』昭和六年八月）参照。

18 創立時、コップに加盟したのは、日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）、日本プロレタリア美術家同盟（ヤップ）、日本プロレタリア演劇同盟（プロット）、日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）、プロレタリア科学研究所（プロ科）等、一一団体である。

19 例えば、コップ傘下の日本プロレタリア作家同盟は国際革命作家同盟（モルプ）、日本プロレタリア演劇同盟は国際労働者演劇同盟（ＩＡＴＢ）に加盟し、それぞれ、その日本支部となっていた。

20 野間宏「解説」（『日本プロレタリア文学大系』第六巻、三一書房、昭和二九年一一月）、平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭和三八年一二月）参照。

21 林房雄「プロレタリア文学の再出発」（『改造』昭和八年一〇月）、徳永直「創作方法上の新転換」（『中央公論』昭和八年九月）等参照。

22 平野謙は、林の一連の発言を、文学上の正論として、極めて高く評価している。『昭和文学史』（筑摩書房、昭和三八年一二月）、『文学・昭和十年前後』（文藝春秋、昭和四七年四月）参照。

23 日本プロレタリア作家同盟第三回拡大中央委員会「ナルプ解体の声明」（昭和九年二月二二日）参照。

24 労農芸術家連盟は、昭和七年五月に一度解散しているが、その後、昭和九年二月に第二次労芸が再結成されている。本稿で言及したのは、後者の解散である。

25 ナルプの崩壊は、戦前日本のプロレタリア文学運動における致命的な敗北であると同時に、運動上の束縛や危険から逃れられるという点で、作家たちにある種の解放感や安堵感をもたらす出来事でもあったようだ。亀井勝一郎・中野重治・林房雄他「座談会 ナルプ解散前後と「転向」の問題」（『近代文学』昭和一九年四月）、高橋春雄「転向文学の季節」（吉田精一他編『日本文学の歴史』第一二巻、角川書店、昭和四三年四月）参照。

26 山中恒『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）、『少国民戦争文化史』（辺境社、平成二五年一〇月）参照。

27 文芸家協会編『文芸年鑑 一九三四年版』（改造社、昭和九年六月）参照。

28 未明は、日本民族・文化の独自性を擁護し、その発展を期する立場から、ナチスに一定の評価を与えていた。「私達は、独逸に於ける、ナチスのとりつつある行動を悉く肯定するものではないが、自国民

族の精神文化を危機より救ひ、正しき伝統の上に、創造と躍進を叫びつつあるは、萎靡（いび）せる人心を興起し、国民に理想と真に行ふべき進路を与へるものとして同感すべきものがあります」（「最近の教育問題を通しての感想」『教育時論』昭和八年七月一五日）

※なお、本研究は、北海道大学大学院文学研究科「共生の人文学」プロジェクトの助成を受けたものである。